

越谷市郷土研究会主催

第二八四回 史跡めぐり

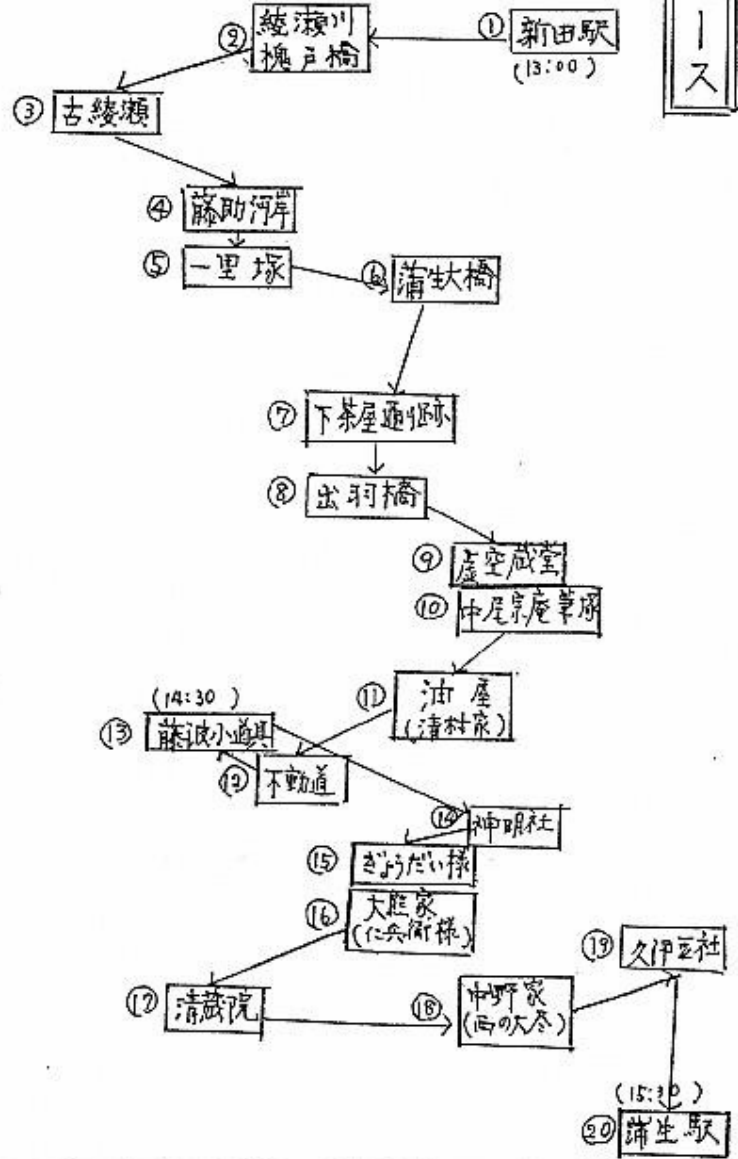
案内 高橋正澄

蒲生茶屋通りと

その周辺

平成十二年十二月三日

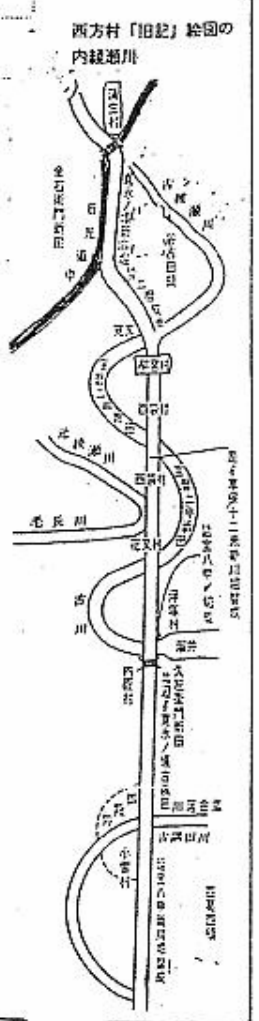
コース



① 新田 駅

蒲生駅同様、明治三十二年開設。乗客、乗荷ふるわず、十二年後に一時廃止。谷塚駅の新設で、大正十四年に復活した。現在、乗客は一日当り、三万三、四千人を超え、(乗客、新開とワッパ)

② 綾瀬川 穂戸橋



蒲生村以南の新綾瀬川の改修は、寛永年中(一六四〇〜一六五〇)から、延宝八年(一六八〇)まで約五十年間、続き、隅田川に接続。同時に途中の堰止めが禁止され、排水専用となった。江戸への水運が可能となり、各所に河出岸が発達した。
 岩槻加倉の妙見河出岸、足立郡の草加河出岸はよく知られている。(越谷市史)
 羊七河出岸、藤助河出岸、足立郡の草加河出岸はよく知られている。(越谷市史)
 穂戸橋(板橋)の架橋は、昭和初期、牛車、リヤカーの通れる、中ニメートル程度の橋、それまで、穂戸、草加、青柳の人々は、蒲生大橋、中根橋を利用していた。

③ 古綾瀬

古綾瀬は新綾瀬川の掘削により、田に変はうするが、現在もなお、曲折しながら、草加、松江町で、新綾瀬川に接続している。起点は、谷古田用水(愛宕河)



写真(4) 草加の新綾瀬川 (昭50) (埼玉県部分省物誌)



写真(5) 草加の古綾瀬川 (埼玉県部分省物誌)



藤助河出岸 (越谷市史)

④ 藤助河出岸

綾瀬川沿いの新田との境にある舟便による河岸で、江戸時代の中頃に創立され陸盛をみた。鉄道の普及等で廃止されてゆく河岸場のなかで、なお繁昌した綾瀬川舟運では唯一の河岸場であった。それは越ヶ谷町等の殆どの荷が東武鉄道を利用せず、藤助河岸から東京方面に送られていたからである。

ことに同河岸は大正二年四月、資本金五万円の株式会社となり、以後武陽水陸運輸会社といわれ、陸上運送や倉庫の貸付業務等も取扱うようになった。舟運の品物は岩槻町の白木組、飯板地(かやど)、胡麻油、蔬菜類、粕壁町の栗極実、醤油、味噌、米、麦、胡麻油。越ヶ谷町の米穀類、わら縄、苳類、味噌等であり、年間の出荷高は、一万八〇〇〇余駄、着荷は二万駄以上に及んだとい

う。(大正五年「越ヶ谷案内」による)
 以後、大正九年越ヶ谷駅が設置され、越ヶ谷の荷が東武鉄道便にとって変わり、次第に衰退の一途をたどり、昭和の初期には、事実上廃止され、現在、藤助河岸の経営者であった家は酒屋を営んでおり、着船時の積下し用の小屋は、復元されて現存している。

(藤生歴史ものがたり)

⑤ 一里塚 (県指定文化財)



蒲生の一里塚 (越谷市史論館蔵)

⑥ 蒲生大橋

土橋、崎玉郡と足立郡を結ぶ。平成元年新緑瀬大橋架替により廃止される。新緑瀬大橋 長さ七メートル、幅員一五メートル。石碑 越谷側：水野下長橋 草加側：高次虚子

江戸時代の各道中には、旅人行程の目安として一里(約四キロメートル)ごとに一里塚が築かれていた。そして、その多くの一里塚には、目印として、エノキが植えられていた。蒲生の一里塚は、日光街道蒲生の南端、田出羽塚の東側に位置し、塚には、エノキ・ケヤキ・イチヨウなどが生い茂っている。蒲生地区では、古くからこの山を「一里山」と呼んでいたことや「新編武蔵風土記稿」などに記されていることから、一里塚がこの小山であるといわれているが文化年間(一八〇四〜一八一八)編さんの「五街道分間延経図」により一里塚であることが確認された。

(越谷市の文化財)

⑦ 下茶屋 通り跡

資料①②③④⑤参照。綾瀬川改修のため、三軒転居土橋、綾瀬道(慈恩寺道) 道宿伊保、妻塚 樋戸への分岐点。昔大申場、成田山への道標あり

⑧ 虚空蔵堂

田出羽畑にそい、日光道から左折した道は、慈恩寺道とも称された古道で、この道端には古くから虚空蔵菩薩が祀られていた。ここには、文明二五年(一四八三)銘の青石塔婆がはじめ、正徳元年銘の土付青面金剛や、観音の屋像を戴いた。これより、おんじみす四里と刻まれた寛保四年(一七四四)銘の道しるべが建てられ、身持の人びとに親しまれてきた。何の中心ともなっている。綾瀬川の改修により平成三年現地に移転。(わか町愛宕町の改修事業)

⑨ 中尾茶屋 草塚

中尾家蔵、中尾、延喜のわたわり、安政四年(一八五三)まで、当屋に笠山社を開設、五々今人の門弟を輩出している。松大建、中柳柳助、文春などの有名な人材を輩出している。また、延喜においても、志忠かめると、風雨大雪、深夜にあっても、成珍といふ、四野者等は、草料を請求し、たど、たど、人々のう、中尾茶屋と称され、尊厳された。(蒲生茶屋校治書)

⑩ 油屋 (蒲村家)

蒲生村まごの地主、明治以降、村政、県政の中核として活躍した高橋(蒲村)蔵。半城公機(寛) 江戸期、油業を営んでいたことが、通称「油屋」と呼ばれている。

⑪ 不動道 (道標) (庚申塔)

日光道から大相模不動への分岐点、付近に、えびす屋、たい、く屋、などの茶屋あり。明治九年、三遊亭内朝はこの茶屋、ソウレか、で、盆三日、馬はのます、粉粉、水と、ま、う、を、残、し、て、い、る。旧日光街道、蒲生片町焼米茶屋、その茶屋組より奉行地への入口に、石仏が二体安置されており、その内の一体が通称「不動さま」と言われて、付近の人々の愛称になつて現在でも多くの方が、お参りされている。白石の表面に「是より大きがみへ」と深く刻まれ、向かって右側

距離が記されている。さて昭和の初期まで、当時射屋の職人さん達が、賽参りの為、綾瀬川の水で身を清め、白の袴・白の半股引、冠で腹巻をしめ提灯を持ち夕刻、この不働様にお参りし現在の二丁目、三丁目を通り大相模不動尊に、かけ足でお参りする姿を見られた。

あとの一体の石塔は既申様で、江戸時代、土地の人達が、疫病等の侵入のない様に念じ、又庚申講も広まり、念仏講と習合したり、農神としても崇め仏教と神道の結びつきによる信仰かと思われる。

(浦主歴史ものかたり)

12 藤波 小道具

二代目藤波与兵衛の妻、うたの子は、浦主村大熊家より嫁している。その縁で、関東大震災の際藤波小道具の職人々大熊家に避難している。また大平洋戦争の際も大熊家に小道具を疎開している。現在、浦主地区に、倉庫・五棟と宿っている。(高野カ代傳宮会表資料)

13 神明社

当社は「郡村誌」によると、享保十九年(一七三四)二月勧請、祭神、天照大神、祭日十一月三日、小名、見田方、十七戸の氏社と伝えている。天明八年(一七八八)四月、并殿一棟創建、寛政六年(一七九四)三月、本社再建、いずれも大熊仁兵衛によるもので、往時、面積、百七十四坪、神楽殿まで備えた社であった。末社、牛頭天王(紫賀神社)、祭神、須佐之男命、祭日七月十五日、青宮十四日、地元では天王様と称し、

(浦主歴史ものかたり)

かつては、太鼓の時に神楽が奉納された。また、若者、子供等によって、神輿が担がれ、夜店なども出て大いに賑わった。現在、社も祭の規模も縮小されたが残っている。境内には、文政十三年(一八三〇)銘の神明宮の御神木の松の根柢、「きよ、しん、さん、はる」と女人の名が刻まれた昭和七年(一七七〇)銘の庚申塔がみられる。なお、村社、久伊豆社に合祀されていた天王社は、最近、氏子の要望により元の神明社境内に戻っている。

15 ぎょうだい様

浦主二丁目自治会館近くに、壁か鳥か、河童(かっぱ)のような得体の知れない形の石塔がある。その白石に、「砂利供養」と刻まれ、宝暦七年(一七五三)の年号とこの石塔建立の人の名が刻まれている。地元の人々は、これを「ぎょうだい様」と呼ぶ他に「おかさま」または「ぎょうじや様」とも呼んでいる。石塔は、この年に日光街道大修理が行われ、道に砂利が敷かれた記念碑である。また道路の神様といわれ、旅の際の足を痛めないよう、道中の安全を祈って建てられ、おらじ等が供えられていたといわれ、現在も健在である。



ぎょうだい様 (砂利道供養塔)

14 仁兵衛村 (大熊家)

大熊家菩提寺光明院に残されている記録及び新編武蔵風土記によると、大熊三郎左工門が、慶長年間到大熊久兵衛家(現在の浦主三丁目にあった)ようだがその跡はない)より分家した。紀伊熊野に生まれ、紀伊中納言の臣下安藤兵の家来仁兵衛が浪人となり、大熊三郎左工門宅に来た。その人品才智が勝れていると見て、三郎左工門の娘婿とした。大熊家は四十二町歩の土地を持っていた。仁兵衛に二人の男子がで、仁兵衛元和二年(一六八二)死亡。その遺言により、兄三郎左工門は二十一町歩と家財の半分を持ち、母を伴って光明院近くに屋敷を構えた。その後名主の土地を買い、街道に屋敷を造った。それが一丁目の旧日光街道(茶屋通り)の屋敷と思われる。それが仁兵衛家の後の呼び名「かいどう」の起りではないかと推察される。そして初代仁兵衛を先祖とした、以後代々仁兵衛を名のり、村の名主も世襲し、浦生の草分けとなった。

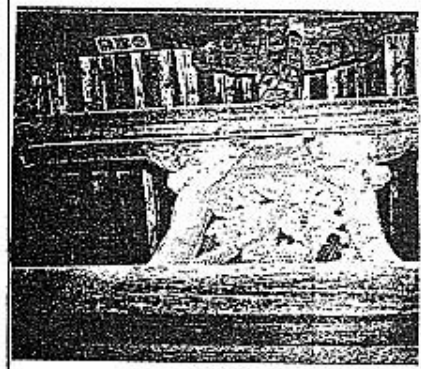
宝暦九年(一七五九)初代仁兵衛死後七十七年に、享保十七年(一七三二)の洪水により大崩壊となった折、多くの窮民を救ったということで幕府より褒賞として、白銀三枚賜っている。同年、菩提寺光明院に田三反十四歩の寄進をした。この頃、短刀・定宗の刀など、先祖の所有物として盛っていた。大熊家の屋敷は、現在の二丁目の大半を占めていたようだ。久伊豆神社の東に流れる出羽堀に染った家に「おやしき」という呼び名がある。また神社の北にある笹島さんは、先々代が大熊家からこの土地を買って、住むようになったという。昭和初期まで残っていた大熊家の屋敷跡には、現在三十戸程の住宅・店舗・倉庫・作業場・集会所等が建ち並び、かつての広大さを物語っている。

(浦主歴史ものかたり)

⑩ 清蔵院

新義真言宗 尾立郡原村(現川口市)密蔵院末、慈眼寺と号す。本尊は、十一面観音、開山、祐範、寂年を伝えず。中興の僧、永智、明暦四年(一六五八)三月二十一日寂す。
表門、龍獅子狹の彫刻物あり。古色に見ゆ。左甚五郎作という。
鐘樓は、元文四年(一七三九)の銘あり。圓隆堂、辨天社 (新編武蔵風土記稿)

●清蔵院の山門(市指定) 昭和五十九年九月二十七日 蒲生清蔵院の山門は、屋根など部分的に改造されているが、その棟札により寛永十五年(一六三八)、開西の工匠による建立であることが確認されている。
ことに、欄干に掲げられている龍や虹梁の彫刻なども江戸初期の素材な彫刻様式とうかがわせている。
なお、この山門の龍は、巷間の伝説では、左甚五郎作といわれ、夜を夜な山門を脱けだして田畑を荒らしたこ



清蔵院の山門 (越谷市の文化財)

とから、これを網で囲ったという。おそらく、この山門の建立者は、日光東照宮造営に動員された工匠の一人が日光への往返に世話になった因縁から、東照宮竣工(寛永十三年)後再び、国元から蒲生に來て、この山門を建立したものと推察できる。

⑪ 西の大倉 中野家

中野家の始祖は、その家譜によると中野左近と称し、豊臣秀吉の家臣であった。天正十八年(一五九〇)秀吉に随って小田原北条攻めに参戦、次いで奥州攻に向かったが途中瓦曾根の地で病に倒れ、しばらく当地に滞在していた。その後、慶長二年(一五九七)蒲生の現在地に

土着してこの地の開発に努め、蒲生西組の名主を勤めるようになった。
この家には宝暦十二年(一七六二)の蒲生村検地帳をはじめ、奥州出羽三山や相州大山参りの貴重な道中記などの古文書が多く残されている。
(蒲生西組末裔がたり)

⑫ 光明院持ち久伊豆(村社)

久伊豆三宇 一は、光明院持ちにて、村の鎮守なり、応永年中(一二九四―一四二八)の鎮座をいう。
一つは、清蔵院持ち、一つは、村民持ちなり
(新編武蔵風土記稿)

久伊豆社は「埼玉郷土辞典」によると、飛鳥時代、欽明天皇(五三九―五七二)のとき、岩槻大田に、土師氏が出雲から勧請し、社殿を奉建したのが始まりと記されている。

それに、久伊豆社は、綾瀬川と古利根川、新方領、隅田川(春日部・岩槻)を経て、元荒川(利根川の合流部)にかけての間だけに分布する社である。

このことは、平安末期から鎌倉時代に活躍した武蔵七党の野与党一族の支配地と重なることから、久伊豆社は、野与党の氏神とみられている。

従って、蒲生の久伊豆三社の勧請も、野与党支配の影響と解しても不思議ではない。
因みに、綾瀬川の西は、いずれも、永川社、古利根川や元荒川の東は、すべて香取社と、はっきりと区分されている。

⑬ 久伊豆三社

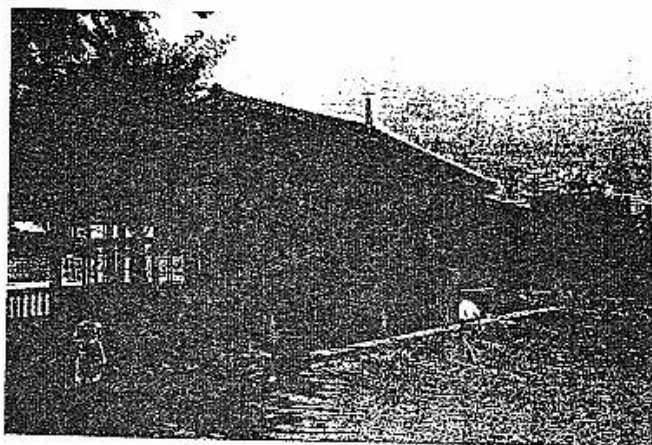
(1) 清蔵院持ち久伊豆

現在、境内には、元禄十三年(一七〇〇)の銘の青面金剛庚申塔や榛名神社、体守護神社、昭和三十五年、総工費二十五万円で建立した花崗岩の大鳥居、神社仏閣巡拝記念碑、御手洗石、植林奉納碑、大東亜戦関係兵士願解消碑神、また、社殿裏手には、当地、中野光治郎(流力)が、大正八年に奉納した三十五貫、四十二貫の力石がみられる。

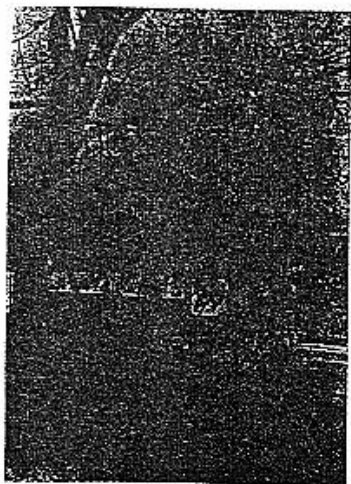
清蔵院持ちであった久伊豆社は、新国道(現足立越谷線)ぞい、新旧道の合流点近くに再建されている。

かつては、もつと境内が広く(九七坪)樹木も植えられていたとのことであるが、新国道新設により、境内が縮小されたとのことである。

境内には、文政七年(一八二四)銘の文字庚申塔がみられる。
社は、現在、土地所有者である西町一丁目の浅見家が守護している。



昭和33年頃の浦生駅。左側に大いちょうの樹。駅舎左手には待合室があった。



浦生駅前の石塚墓

(浦生歴史ものがたり)

②西組持主 久伊豆

村民(西組)持ちである久伊豆社は、村人に小鎮様と称され、村社、久伊豆社の妻手、出羽掘の端に鎮座している。

かつては、浦生西組惣領、六十五戸の氏持であった。「浦生村誌」は、創建、永禄二年(一五五九)三月、再建、正徳五年(一七一五)二月と伝えている。

境内には、宝永三年(一七〇六)銘の首面金剛殿申塔、慶応二年(一八六六)銘の文字庚申塔がみられる。また、かつては、西組山王の野道筋に連立されていた山王社が、宅地造成のために、当社境内に移転、合祀されている。

(浦生歴史ものがたりより)

浦生駅の開設は明治三十二年十二月二十日。現在のヴァリエ南端付近に駅舎があった。

しかし、明治四十二年二月二十五日より、集落に近い現地に移動している。浦生駅乗降客のピークは平成二年で、一日平均三万二千人。

現在、新越谷駅へ運急停車駅に降るなど、浦生駅発展に伴い、現在、一日平均約一万九千人に減少している。

因みに、新越谷駅の乗降客は一日平均十万人と比べている。

(東武鉄道百年史・東京新聞「ヨロバ」)

清蔵院
中野家
久保神社
新田邸



油屋
一里塚
新藤助河岸
菅生大橋
旧藤助河岸
綾瀬川
日光道
茅吹ハイツ



小鎮棟

久伊豆神社

羊七河岸

上座殿堂
岩槻道

出羽橋

日光道

綾瀨川

綾瀨川

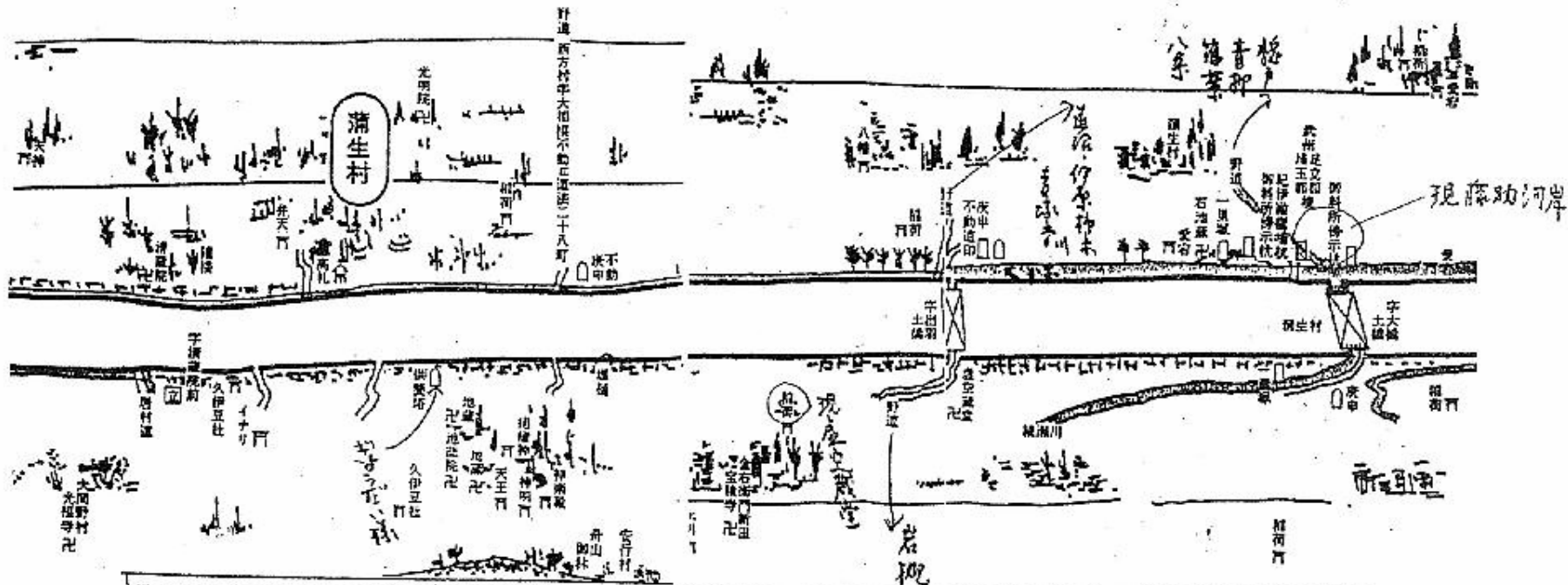
旧藤助河岸

一里塚

急水

出羽城

五街道分間延絵図 (文政年 1804~1816)



増補行程記... 寛延4年(1801)奥州南部侯に命せられた絵師 道
 清水秋全が描いた日本橋・盛岡間の風景絵図

- 満生村御代官舟橋安右衛門殿預り場。内。名物也。茶屋多し。満生宿片かわ下長し。一里塚
- 百姓屋村跡。此。海道廿八九丁余長し。家群。茶屋廿間(軒)余
- 満生堀子。ニ以塚下中。此。此。有之。七。子細。如。し。盛岡の住待と。用水。土橋多し

箕山先生墓碣銘

箕山中尾先生墓碣銘

日本弘道會長正三位勳四等伯爵德川達孝篆額

明治三十九年丙午夏五月二十七日箕山先生沒享年七十越二十九日葬于蒲生村摩尼山地藏院之塋四十五年壬子春二月門弟子相議磨珉謀不朽徵銘予不敏知非其任然幼時從先生受句讀最被親愛義不可斲因敘其梗概曰先生諱良智通稱邦友郎後更宗悅箕山其號關山道悅君諱晉長子也妣某氏以天保八年丁酉秋七月生先生於武藏國足立郡高畑村資性溫厚幼好學從岩槻中尾某學後執贄太田錦城學蒙精藪不好博涉象以醫為世業故從家君講究古方安政四年丁巳春二月中尾宗庵君諱清風請為嗣以女配焉爾來聚徒講經鄉黨來學者多矣先生謂醫仁術也然不明方伎而行治方則反傷人命不仁莫大焉長沙之術不可不慎焉中年毅然決意學洋方於齋藤適齋及牧山修卿研鑽數年大有所得焉是以乞治者請教者益衆先生恒日益神智在於講學講學無如詩書春秋滿詩書春秋無如論語礪磨道義在於友友必擇端人論賢否辨是非諄諄提誨一以有英為樂好國風工詩賦尤長近體荒村僻落間往往起伯畢之聲者實先生之化也先生視人疾猶己病焉有人告急者雖風雨大雪深夜臂青囊徒步必赴之用意周到能立奇功乞治者有不謝者毫不介意是以其名日高其聲月噪嗚呼使先生在大都驥足可以展布走馬躡躡一鄉不得以千里稱豈可不惜焉哉一日疾大發自知不起詠國雅一首述志以戒後事領之門弟子端坐而瞑原配生二子皆先沒繼室原配之女弟生三男三女長男浩造次次參造殤長女配養嗣國四郎而沒次亦配國四郎次適中村氏銘曰

回生起死

如時兩周

方伎之妙

似春風柔

教育子弟

三十餘秋

其惠其化

世無匹儔

大正二年十一月建

千葉縣東葛飾郡會議長杓丸健撰

東京

樋口敬之書

編5よ生協蒲「報友議進推コミニテ地区生蒲」
『蒲生茶屋通り周辺の風景』

追想三題
高橋正澄

私は、現在、一里塚下の畑で野菜作りの真似ごとをしている。

多分、歳のせいかもしれない。最近、一里塚周辺の四季や家並みの変貌ぶりを眺めていると、少年の頃通した綾瀬川や日光街茶屋通りの風景、そして、人々との人情の触れ合いが懐しく思われてならない。

1 曾祖母のこと

私が、少年の頃(昭和十三年小学校入学)出羽堀を挟んだすぐ目の前、蒲生大橋の袂に、目の不自由な曾祖母が住んでいた。

そのため私は、年に何度か遊びに来た曾祖母の手を引いて、例の住いまで送って行った。時には途中、愛宕様(一里塚)まで足をのばして長いお祈りを待つこともあった。

家まで送ると、決まって「駄賃」といって、五銭、それに、少々の菓子添えてくれた。

そんな曾祖母と、道中、何を話したかは、よく覚えていない。が、たった、一言「子供の頃は夜が物騒でおっかなかった。」と語ったことだけは、妙に脳裏にこびり付いている。

そんな曾祖母も、私が小学校四年生(昭和十八年)の時、九十歳で亡くなった。

叔母が、庭先の水仙の花を摘んできて、棺の中に手向けたのを覚えている。

今、考え逆算してみると、曾祖母は、嘉永年間(1824-1830)生まれ、子供の時代から青春時代を幕末の動乱期に過したことになる。

曾祖母は、街道を行く人々の風体や言動から風雲を生き世の変動を自分の目で見、耳で聞いているのである。

暗い行灯の光に身を寄せ、怯えて夜を過ぎた心境「……おっかなかった。」が、なんとなく分かるような気がする。



あの曾祖母の皺だらけの手に、激動する幕末から明治、大正、昭和へと生きぬいた逞しい血が流れていたかと思うと、感慨もまた無量である。

2 綾瀬川のこと

現在、水質汚染で悪名高き綾瀬川も、私の少年時代はまだ綺麗だった。

川岸近くには、エビモ、キンギョモ等が繁茂し、藻刈り舟が出るほどだった。また、川端に仕掛けられた瓶どう(漁具)にも、キラキラと光る小魚の姿が見えた。

こんな綾瀬川は、夏、子供等にとって格好の楽園と化し、そして子供等を育てた。

水浴びに魚釣り、川辺の徘徊……。なかでも、流れ来る大きな藻塊に乗って、身を天に向けての山下りは痛快だった。

そして、秋から冬、綾瀬川と出羽堀の合流点では、投網打ちの姿が見られた。

小舟の船先に立ち、竿さばきよろしく、スーッと襦袢に近づいては網を打つ。私は、漁夫のその機敏な動きが大好きだった。

ところで、私が育った藤助河岸であるが、もつ、その頃水運の業務はなかった。

だが、水運が全く消滅したわけではない。舟頭の持ち舟による水運はあった。主として、薬工品や砂、下肥等の輸送だったようである。

何度か松原付近を北上する帆かけ舟を見かけたこともある。のどかな風景だった。

私が、五歳の時だったと思う。周辺の大人達と、川岸から出る舟で隅田川の川開きを見物したことがある。肝心な火花は覚えていないが、サイダーをたらふく飲んだことだけは覚えている。まことに情けない話である。

これが私にとって、最初で最後、一泊二日の舟旅であった。

そんな綾瀬川が懐しく、本年九月、待望の一級河川綾瀬川の起点、桶川市小針一四五九番地に立った。そこは、幅一メートルそこそこ、草の生えた、なんの変哲もない排水路に等しい川で、ある種の驚きを覚えた。

追想

高橋 正 著

3 愛宕様(一里塚)のこと

少年の頃、通称「あたご様」と呼ばれていた浦生下組(現愛宕町)の愛宕神社は、文政五年(一八二二)編纂の『新編武蔵風土記稿』によると、『小名 下木屋、コロニ、一里塚アリ、塚上ニ杉樹植テ、傍ニ愛宕社アリ』と記されている。

この塚が、文化年間(一八〇四―一八一八)幕府編纂の『五街道分間延絵図』と合致することにより、日光道中の一里塚と確認されたのは、ずうっと後の昭和も五十年代のことです。それまで、地元でも、一里塚のことが話題になることはなかった。

この愛宕様の鎮座する老樹營える一里塚こそ、私達少年が数々の思い出を刻んだ懐かしい遊び場だったのである。

私達恵太郎は、危険を返り見ず、よく、これら樹々に登り、そして、大人達に叱られた。

勿論、今は失せた『記』に記述されている筈になった杉の樹にも登った。

それから、出羽堀に向かって這うように伸びた銀杏や松の老樹にも、それに、社の扉根伝いに登る。

標の大樹にも挑戦し、これらを征服した。当時、好奇心旺盛な少年達は、樹上から綾瀬の川筋や街道沿いの家並みや田圃に浮かぶ集落など、まるで、時が止まったような閑なふるりの風景を眺め、楽しんだ。

しかし、塚の北端に營える板の大樹だけはとうとう、征服できずに終わってしまった。今でも、時折り、曲線の合間をみても、その人を寄せつけぬ雄姿を仰ぎ、好奇心に燃えた少年の頭を思い、懐しんでいる。

また、これら樹々の下では、見知らぬ人々の様々な姿も目にすることができた。とりわけ、夏の昼下りなど、蟬時雨を耳に涼をとりながら、井端をつかったり、荷造りをしたり、昼寝をしたりする行商の人々を、

よく見かけた。

時には、富山の莖屋のように、紙風船をくんだり、地方の珍しい話や怪談めいた話をしてくれる人もいて、少年達の目を輝かせた。

一度、若き修行僧が筆に水をつけ、黙々と新聞紙に文字らしきものを書いては瞑想する異様な姿を見せてくれたことがある。

私は、この修行僧の什草が不気味で、遠くから、息を飲んで眺めていたのを覚えていた。日頃、静かな愛宕様も、七月十三日、二十四日になると、周囲の雰囲気は一変する。

この両日は、氏子待望の愛宕様『祭神』迦具土命(火防の神)の祭礼なのである。

少年達は、綺麗に清掃された社や出羽堀沿いに飾られた箱灯籠を眺めたり、茶店から漂う焼き団子の匂いを嗅ぎながら、夜、一年ぶりに賑わう夜店への思いで胸が弾んだ。

誠に、罰当りなことではあるが、私の頭には、祭礼当日、社に詣でた記憶がない。

ただ、アセチレン灯の輝く夜店で、おもちゃや古本を物色した記憶だけが鮮明に残っている。

私は、ぜんまいではなく、ろうそくの熱で「ボン。ボン。ボン。」と快適な音を発して走るブリキ製のポートが不由議で買ったことがある。科学の面白さを知ったのも、多分、この頃ではなかったかと思っている。

あれから、五十年、愛宕様を取りまく風景は、すっかり変わってしまった。

そんな中で、塚下に並ぶ石仏と老樹に覆われた愛宕様だけは、昔と変わらず、泰然として、先人の心や自然の摂理を語りかけている。

かつて、目の不自由だった曾祖母が「愛宕様へ。」と言っては出かけ、塚下の不動明王から十三弘礼拝供養塔、六地藏、そして、愛宕様へと順に足を運び、長々と祈り、語りかけていく気持ちも分かるような気がする。

あの僅か十数坪の地、愛宕様には、過去、三百年、先人の生きた、様々な思いが秘められているのである。



●参考文献 新編武蔵風土記稿…歴史図書社
越谷歴史物語…越谷市教育委員会
日光道中…埼玉県教育委員会

追想 高橋正彦

4 茶屋市(牛蒡市)のこと

越谷で「市」といえば、室町の昔から栄え、今でも、場所を変えて営まれている越ヶ谷の六蔵市(二・七の市)が有名である。

往時には、米穀類の相場まで立ち、近郷近在の人々で大いに賑わったとのことである。

私も戦間、灸をすえた婦りに、一度だけ、祖母と街道を歩きながら生活用品の並ぶ「越ヶ谷市」の光景を見た覚えがある。

ところで、吾が蒲生にも、年に、たった一日、いや、半日かもしれない。

年末の二十四日には、蒲生茶屋上通りに、歳の市、通称、「茶屋市」が立った。

私にとっての「茶屋市」は、戦争中の昭和十二年から十八年までの少年時代と二十五年から三十二年頃までの青年時代であるが、とりわけ、おもちゃや食べ物に惹かれ歩き回った少年時代の印象が深く、懐しい。

「市」当日は、幸か不幸か、丁度、一学期の終業式に当り、通信簿の成績如何では、小遣銭への影響もあり、この期の成績には、特に気を採んだ。

「市」は、現在の蒲生二丁目、神倉燃料店から蒲生郵便付近にかけての約百メートル位の沿道に立った。

歳末ということもあり、正月用品が主で、神棚や門松を始めとする各種飾り物、御玉杓子、柳箸、箆や瀬戸物類、それに、下着等の衣服類もよく並んだ。残念ながら、「牛蒡市」にふさわしい牛蒡等の野菜が並んだ光景は、記憶にない。

そんな中に、私達少年の目指す、おもちゃや駄菓子を売る店が散在していた。私は、吹き矢に魅せられ、そして買った。確か、五銭であったと記憶している。口徑約一センチ、長さ約五センチのボール紙製



の筒で、しかも、金紙、銀紙を螺旋状に巻いたかなり派手なものであった。新聞紙で作られた円錐形の矢を入れ、「スポン」と吹き、「ブーン」と標的に当てる遊びは、まるで、昨日のことのように覚えていて。

それに、リヤカーの屋台で売る、おでんやどんどん焼き(お好み焼き)も、家の人には内緒で、よく食べた。葱、生姜、切り鳥賊、少々、値は違うが、皿代わりの新聞紙に載せて、ソースの匂いを嗅ぎながら、ふう、ふうしながら、友と食べる味、その雰囲気は格別で、少年時代を語る上で欠くことのできない楽しい思い出である。

こんな「茶屋市」も、戦争による物資の不足は如何ともし難く、まず、食べ物や衣類から消えた。

人々は、年々寂れいく「市」の姿を傷心の思いで見つめ、往時を懐かしんだものである。

しかし、「市」が盛況だった戦前に、青少年時代を過した人々の話によると、私が見た「市」よりも、はるかに、規模が大きいくずうっと、上手の方から、安行方面の良質の牛蒡や人参、里芋等を始め、数の子や鯉等の乾物類、古着や端布を売る呉服屋まで出店して、近隣の老若男女で賑わったということである。

一頃、浅草雷門の「いねやモスリン店」が鳴り物入りで出店し、人気を博したそうである。当時、夜なべをして縄ないで稼いだ種持九十銭で、チリメン一反を買ったが、家へ帰って見ると、ファイバーと分かり、父親に叱られたと、苦い体験を話してくれた人もいた。

こんな、蒲生の歳末の風物詩も、交通事情や流通機構の変化により、四十年代には姿を消した。しかし、「茶屋市」の名残りが、一店だけ、また、清盛院の参道に出店し、年末を飾ってくれるのは嬉しいことである。



追想

高橋正道

9 千住馬車鉄道

および、草加馬車鉄道のこと
今から百年ほど前、明治二十六年四月から同三十三年七月まで、七年余の間、旧日光街道を馬車鉄道が走っていた。

当初、千住馬車鉄道は、千住茶釜橋（千住北組新屋、現荒川放水路河川敷）を起点に粕壁最勝院前まで往復二回、約四十キロメートルをおよそ三時間で走ったとのことである。

因みに、蒲生河岸、草加間四・五キロメートルは三十分で、三銭、蒲生河岸、千住間十三・五キロメートルは一時間三十分で十一銭であった。（後、蒲生河岸は三軒屋に替わる）

当時、馬車鉄道は一頭立て、乗客定員十二名、取者、車掌を含めても十四名乗りと言うちやちな乗物ではあったが、地域住民にとっては、文明を肌で感じる、ロマンに満ちた兩期的なものであったに違いない。

明治維新から二十数年、東京と地方都市を結ぶ交通網は、日本鉄道（現JR）により急速な進展を遂げていた時期である。

にも拘わらず、日光街道周辺の交通事情は馬車、荷車の増加や燃筒に代わる人力車の出現は見られたものの徒歩主体の交通においては、江戸期とさして変わらなかつたのである。

こんな最中、軌道の上を、静かに、速く、多くの客や荷を乗せて運ぶ馬車の出現に、人々は、驚異の眼差しを向けていたに違いない。草加市の郷土研究者、鈴木平八郎氏は、「草加を走る馬車鉄道」の中で、馬車鉄道の速度について興味深い記事を残している。

これによると、馬車鉄道は、ゴツゴツした路上を走る乗合馬車に比べて、およそ、二倍の速度を有していたとのことである。

普通、騎乗した馬の速度は、常歩で一分間百メートル、速歩で二百メートルと言われている。馬のためには、五分間速歩、十分間常

歩で十五分間に二千メートル進むか、速歩、常歩で五分間づつ、つまり、十分間で千五百メートル進む乗り方がベストとのことである。これは、同二十六年二月に配布された千住馬車鉄道の広告に記載されている発車時刻表にも符合し納得できる。

また、時刻表によると、朝から夕方まで上下とも十本、およそ一時間おきに走り、千住、浅草広小路間、粕壁、杉戸間は乗合馬車で繋いでいたようである。

こんな地域文明の象徴であった馬車鉄道も馬糧費や人件費、線路改修工事等の出費がかさみ、その上、今後開業される東武鉄道との競争は困難との判断から、千住馬車鉄道は、同三十年七月それを引き継いだ草加馬車鉄道も同三十三年七月に廃業の止むなきに至った。

しかし、当時、資本金十五万円をも投じて地域産業発展のためと夢をかけて取り組んだ人々の勇気ある意気ごみだけは、単に、「時の産んだあだ花」と片付けてはならないと思っている。

私にとつて、旧日光街道は、六十数年來の生活道路であるが、これまで、馬車鉄道の少々の痕跡すら目に留めることも古老からの話も耳にすることはなかった。街道の何処を走っていたのかすら分からないのである。

しかし、同二十五年十一月二十二日、千住馬車鉄道株式会社社長 高木洽荘氏より井上馨内務大臣宛への願書――

「当会社鉄道線路中、南埼玉郡蒲生村新田橋以北、南三百間、道路東側電信柱二沿ヒ、鉄軌布設計相成届候処、右設計ニテハ人馬ノ不便少候ニ付、西側ニ変更設置致候間、至急御許可被下度」が十一月二十五日認可されたことにより、蒲生大橋から、約五百メートル、つまり、蒲生茶屋通りは、街道の西側に軌道が敷設されていたことが分かる。

たった、これだけのことであるが、今となると知ることも発見することも難しいのである。参考文献「千住馬車鉄道」春日部市、「草加を走る馬車鉄道」鈴木平三郎氏

